第10課　第三次伝道旅行

【暗唱聖句】

「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」使徒20：24

【今週のテーマ】

今週はパウロの第三次伝道旅行について学びます。

【日曜日・エフェソ（その1）】

「パウロはしばらくここで過ごした後、また旅に出て、ガラテヤやフリギアの地方を次々に巡回し、すべての弟子たちを力づけた」使徒18：23

使徒言行録18章23節からパウロが3回目の伝道旅行に出かけたことがわかります。第三次伝道旅行では第一次、第二次で行った町々の他に、エフェソの町を拠点とすて展開されていきます。それに先立って、聖書はアポロという人物を紹介します。

「さて、アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソに来た。彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。」使徒18：24、25

アポロは雄弁家であり聖書にも精通している人物で、イエス・キリストを信じ、イエス・キリストについて熱心に語り、また正確に教えていました。アポロはやがてパウロに匹敵するような影響力を持つようになったことが、コリントの信徒への手紙一3章4節を見るとわかります。

「ある人が『わたしはパウロにつく』と言い、他の人が『わたしはアポロに』などと言っているとすれば…」第一コリント３：４

さて、アポロは福音を世界に述べ伝えていくために、神様から大きく用いられる人物となっていくわけですが、その働きが進展していく前に、聖書は興味深いことを述べています。それはアポロが「ヨハネの洗礼しか知らなかった」（使徒18：25）ということです。そのため「プリスキラとアキラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した」（使徒18：26）と書かれてあります。これはいったい何を意味しているのでしょうか。「ヨハネの洗礼」とは、悔い改めに導くバプテスマであり、さもなければ神様の裁きを受けるという厳しいものでした。アポロは旧約聖書に預言されていたメシアがイエス・キリストであることを認めていましたが、そこでキリストが教えられた真の福音について理解がまだ乏しかったのだろうと想像されます。また、初代教会の人々が次々に受けていった聖霊についてもよく理解していなかったのではないかと思われます。このことはアポロと同様に、ヨハネの洗礼しか知らなかった他の12人の弟子たちの以下のエピソードからも推測することができます。

「アポロがコリントにいたときのことである。パウロは、内陸の地方を通ってエフェソに下って来て、何人かの弟子に出会い、彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と言うと、彼らは、「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」と言った。パウロが、「それなら、どんな洗礼を受けたのですか」と言うと、「ヨハネの洗礼です」と言った。そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。人々はこれを聞いて主イエスの名によって洗礼を受けた。パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。」使徒19：1～6

【月曜日・エフェソ（その２）】

パウロはエフェソにおいて、会堂やティラノという人の講堂で2年間にわたって毎日説教しました。この結果、「アジア州に住む者は、ユダヤ人であれギリシア人であれ、だれもが主の言葉を聞くことになった」（使徒19：10）と書かれてあります。これは驚くべきことです。さらに「神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われ」（使徒19：11）ました。その奇跡の中には、「彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊どもも出て行くほどであった」（使徒19：12）という現象も記録されています。これは12年間長血を患った女性がイエス・キリストの衣の裾に触って癒された物語と似ています。

　エフェソでの伝道に満足したパウロは、この後「マケドニア州とアカイア州を通りエルサレムに行こうと決心」（使徒19：21）します。エルサレムでは貧困の問題がありました。パウロは自らの危険を知りつつも、彼らを援助するためにエルサレムに出かけることを決心しました。ところでそのころ、エフェソでは思わぬことから騒動が巻き起こりました。それはアルテミスの神殿の模型を銀で造って儲けていた職人たちが、パウロが偶像を拝んではならないと説いていたことから、これでは商売に悪影響だといって騒ぎを起こし、やがて暴動のような騒ぎに発展していったようです。最終的には町の書記官が群衆をなだめて事なきを得ますが、この騒動はキリスト教への反対は、ユダヤ教の迫害者たちのように宗教的な理由だけでなく、生活が脅かされるというこの世的な理由からも起こることがわかります。

【火曜日・トロアス】

パウロはエフェソを去ったあとエルサレムに直行するのでなく、異邦人教会の代表たちを連れてマケドニア州とアカイア州を迂回していきます。トロアスでは1週間ほどの滞在となるのですが、ここで現代の教会が日曜礼拝を根拠するある出来事が起こります。

「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた」使徒20：7

パウロたちがトロアスを出発する前夜、パンを裂くために集まっていたと書かれてあります。おそらく聖餐式を行ったのだろうと思われますが、それが「週の初めの日」つまり日曜日だったと書かれてあることから、安息日が日曜日に変更されたのだとしばしば解釈されることがあるのです。しかし、この解釈はあまりにも強引です。むしろ、パウロたちが次の宣教地へと送り出すために教会の人々が集まってきたのだと解釈するほうが自然です。

【水曜日・ミレトス】

「さて、わたしたちは先に船に乗り込み、アソスに向けて船出した。パウロをそこから乗船させる予定であった。これは、パウロ自身が徒歩で旅行するつもりで、そう指示しておいたからである」使徒20：13

パウロはトロアスを出たあと、一人でアソスまで徒歩で歩き、船で同地に向かった著者であるルカたち一同と合流することになっていました。なぜパウロは一人徒歩で歩いたのかは不明ですが、一人になりたかった理由があったのでしょう。アソスで落ち合った後はパウロも船に乗り、ミティレネに向かい、サモス島に寄港したあとミレトスに到着します。どこの町も1日程度の滞在だけで次に出発するという慌ただしい旅程となったのは、五旬祭にはエルサレムに着いていたかったので旅を急いだからだと書かれてあります。

　ミレトスではエフェソから長老たちを呼び寄せ、そこでパウロは別れの説教をします。そのスピーチの中で、パウロは聖霊によってこれから向かうエルサレムにおいて投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということを語ります。しかしそれをわかっていながらエルサレムへ向かうというのです。そして「神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」（使徒20：24）と言います。またパウロは「自分は語るべきことを語り、走りぬくべき道程を走りぬき、自分に定められた責任を果たした」と語りました。パウロはどんな気持ちでこう言うことができたのでしょうか。パウロはキリスト教会に対する迫害者としての十字架を負っていました。それはどれほど重かったことでしょう。しかし、今やその責任を十分に果たしたと言えるほど、救いのために働きぬいたのです。

エフェソから長老たちに「もう二度と会うことはないだろう」と語ります。自分の死を覚悟しての言葉でしょうか。そして最後のメッセージを語っていきます。「聖霊があなたがたを監督者に任命したこと」「邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れること」「教えを思い起こし、目を覚ましていること」「弱い者を助けること」などです。人々はパウロのメッセージを聞いて激しく涙を流し、接吻して別れを惜しむのでした。

【木曜日・ティルスとカイサリア】

ミレトスを出た後、ティルスに1週間滞在します。そこで信者たちはパウロにエルサレムへは行かないように進言します。聖書は「彼らは“霊”に動かされ、エルサレムへ行かないようにと、パウロに繰り返して言った」（使徒21：4）と書かれてあります。パウロも霊に促されてエルサレムに行こうとしているわけですから、同じ聖霊がそれぞれに違うことを言うのでしょうか。それは考えられません。おそらく両者に共通して聖霊が語ったことは、エルサレムでパウロが大きな苦難に直面するであろうということです。それを聞いて、それでもパウロは行くことを決意し、信者たちはパウロの身を案じて行くなと言ったのかもしれません。

　また次に向かったカイサリアでは、「ユダヤからアガボという預言する者が下って来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った。聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」と、リアルにパウロがエルサレムでどうなるかを警告の言葉を語ります。すると今度はルカたちまでが「わたしたちはこれを聞き、土地の人と一緒になって、エルサレムへは上らないようにと、パウロにしきりに頼んだ」という始末です。

　聖霊は確かにパウロ以外の人々にも働いて、エルサレムで待ち受けているであろうパウロの運命を語ります。しかし、だからエルサレムに行ってはならないとは語っているわけではないのです。彼らがやるべきことは、ただパウロのために祈ることでした。パウロは自分の身を案じる人々に、しかし「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」というのでした。

　エレン・G・ホワイトは「パウロはこれまで、このような悲しい思いをもってエルサレムに近づいたことはなかった」と書いています。わたしたちも心配のあまり、あるいは良かれと思って言ったことが、帰ってその人の心をくじくことがあるということを注意しなければなりません。